Japanese Society for Studies of CHANOYU

茶の湯文化学会会報

No.127

第127号／2025年12月25日
発行　茶の湯文化学会
京都市左京区下鴨森本町15
生産開発科学研究所内
〒606-0805
TEL 075-702-9270
FAX 075-702-9314
E-mail:chanoyu@oregano.ocn.ne.jp
https://www.chanoyu-bunka-gakkai.jp/

「フスベ茶湯」の実験

廣田　吉崇

一　「フスベ茶湯」の一般的なイメージ

第一四〇回直木賞を受賞した山本兼一氏の小説『利休にたずねよ』には、天正十五年（一五八七）六月十八日のできごととして、つぎのような野点の描写がある。

ほどなく浜に出た。

……

「このあたりにいたしましょう」

立ち止まった利休が、供の者にしたくを命じた。

枝振りのよい松のそばに緋色の毛氈をひろげ、虎の皮をしいた。

……

「湯を沸かしますのに、しばらくお時間をいただきます」

これから湯を沸かすなら、ずいぶん暇がかかるだろう。

……

利休はといえば、松の枝に鎖をかけて細長い雲龍釜を釣っている。石を三つ、その下に置いて、松葉を燃やしはじめた。

白い煙がもくもく湧きあがった。

秀吉は、とたんに愉快になった。

「はは。これはよい。これはよい趣向だ。気に入ったぞ」

起きあがって手を叩いた。

「座興でございます。お許しくださいませ」

……

「薄茶をもらおう」

「かしこまりました」

（PHP研究所、平成二十年、二六四～二六六頁）

山本兼一氏が『南方録』の「滅後」にある話を参考としてこの場面を創作したことは容易に想像できる。また、この内容は「フスベ茶湯」に対する一般的なイメージであるといっても差しつかえないだろう。しかし、松葉を燃やして湯を沸かす野外の茶会とは、実際にはどのようなものなのだろうか。

令和七年度茶の湯文化学会大会において、「『フスベ茶湯』をめぐって―野点に関する諸問題―」と題して研究発表をおこない、その一環として松葉等を燃やして湯を沸かす実験について報告した。この際に動画を投影できなかったこと、大会の進行におくれを生じせしめたことは痛恨事であった。この場を借りて、あらためて実験の詳細を紹介させていただきたい。

二　実験方法の概要

まず、燃やす燃料として四種類（①松葉、②枯枝、③松笠、④炭）を、それぞれ十分乾燥した一〇〇グラ

【写真1】燃料４種類

ム相当の量を準備する（写真１）。

そして、炉用の五徳（高さ一三・〇センチメートル）を地面におき、その上に切合の風炉用釜（羽をふくめて胴径二一・〇センチメートル、蓋をのぞく高さ一五・五センチメートル）をかける。釜は容量三リットルであるが、一リットルの水を入れ、当初の水温を測定し、それぞれの燃料を燃焼させ、燃え尽きた時点の水温を測定する。ただし、④炭は燃焼時間が長いため、十分経過ごとに水温を測定した。そして、このような実験を二回ずつ実施した。なお、実験日は令和六年四月十三日である。

三　実験結果の数値とその検討

実験による燃焼時間とその間の水温上昇との結果を整理して示すこととする。数値は前者が燃焼時間、後者が水温上昇であり、二回実施した結果の平均値である。

①松葉：五分〇九秒、一四・五度
②枯枝：八分三四秒、一六・〇度
③松笠：九分二四秒、一四・〇度
④炭：六〇分、九・五度

これらの結果から、①松葉、②枯枝、③松笠それぞれ十分な火力があり、水温上昇が確認できた。実験時の当初の水温の平均値は一八・五度であったので、単純計算すれば、一〇〇グラムの燃料を六回ほど繰り返して燃焼させるならば、湯が沸くこととなる。燃料を適宜補給しながら燃焼させれば、さらに効率的に湯が沸くだろう。

なお、釜に入れた水量は少なめに一リットルとしたが、小振りの雲龍釜ならば五割相当の量である。

一方、④炭は一〇〇グラム相当では炉用の丸ぎっちょ一つ、割ぎっちょ一つのみの少量である。釜との距離もあるためか、大幅に時間がかかる結果となり、六〇分で実験を打ち切りとした。茶の湯で用いる④炭に対して、他の燃料（①松葉、②枯枝、③松笠）は、大きく性質を異にするといえる。

四　実験過程のそれぞれの印象

当該実験は「フスベ茶湯」がはたして茶会として実現可能であるのかどうかを見極めることが主たる目的である。数値的には湯を沸かすことは可能といえるが、さらに、実験を実施した際の印象についてのべておく。

①松葉はたいへん燃えやすく、すぐに釜の上にまで炎が上がる（写真２）。当初二〇〇グラムの松葉により実験したところ、危険を感じたため、一〇〇グラムに変更した。松の枝から鎖で釜をつる場合には、枝自体にも火力の影響がおよぶだろう。

【写真２】松葉・燃焼の炎

ちなみに松葉を五〇グラムに減らして同様に燃やしてみたが、炎の上がり方にそれほどちがいはみられなかった。くわえて灰が周囲に落ちるという問題もある。

松葉はそもそも松脂が多いため、煙も出やすいが、とくに積み上げた松葉の表層部が全面に燃え広がるため、かえって内部が燃えにくく、その際に大量の煙が発生する（写真３）。

【写真３】松葉・燃焼の煙

また、煙のにおいが衣服・頭髪に付着するし、炎も煙もわずかな風向きの変化にしたがい方向をかえるので、釜の近くにいて燃焼を管理することは現実的ではない。

なお、においは釜や五徳にも付着する。実験後は茶室内での使用をためらうほどのにおいがのこった。合成洗剤でも落ちないため、煎茶を入れた湯で長時間煮て、ようやく気にならない程度となった。

②枯枝は、のちに立花実山が野点のことを「柴火ノ会」と書き記していることから、松葉にかえて柴を用いることを想定したためである。柴とは何かはっきりしないので、広葉樹の細い枯枝を集めた。

③松笠を実験の対象としたのは、『長闇堂記』や『細川三斎茶事物語』のなかに貧しい茶人が松笠をくべて茶の湯をおこなった旨が記されていることによる。これは茶室内のことと思われるが、あわせて評価しておきたいと考えた。

実験の結果からは、②枯枝および③松笠ともに、①松葉ほどではないにしても炎は上がるが、煙の量は少な目である。すぐに燃え上がらないため、燃料を少しずつ補給しながら燃焼させつづけることも不可能ではないと思われた。なお、炭と併用する実験はこころみていない。

五　「フスベ茶湯」の実際

以上、検討した結果からすれば、『南方録』から推測される「フスベ茶湯」のあり方は実現可能とは考えにくいといわざるを得ない。立花実山自身このことに気づいていたことは、『南方続録』のなかに「誠に狐狸を責めるにことならす。笑ふへし、恥へし」と否定的に記していることからもうかがえる。

本発表では、おもに釜の湯を沸かす燃料についての議論が中心となったが、近世においては、野点の設営や手順・作法が規範化されていく方向にあった。一方、現代の野点では「自然にじかに接するという風雅の機会を持つことにあり、借景などを遮らずに作意を凝らし、融通性をもつことが主といえる」（『角川茶道大事典』本編、角川書店、平成二年、一〇八〇頁）とされる。また、野点には、濃茶および薄茶が呈されるのか、薄茶のみが呈されるのか、これも近世と現代とでは異なるように思われる。時代により茶の湯の姿が変遷していくことは当然であろうが、この点も考えなければならない問題である。

理事会

令和七年度第一回理事会が、令和七年九月二十一日（日）午後二時よりＺｏｏｍで開催された。理事十四名が出席し、以下の議題について討議された。

一、令和八年度総会・大会について
二、会誌・会報について
三、その他
四、各担当理事より事業報告
五、令和七年度総会・大会の報告

飯島副会長の司会進行で議題に沿って議事が始まった。

第一議題では、令和八年度総会・大会について概略が提案され、承認された。

大会実行委員会（飯島・舩阪の両副会長を中核として、近畿地区の理事・幹事（他地区の理事・幹事も可））を立ち上げ、開催地は京都、開催日（候補）は令和八年度六月十三日（土）・十四日（日）、シンポジウムテーマ「近代の茶の

湯（案）」、可能ならばシンポジウムテーマに沿った見学会の開催（必ずしもテーマに固執するものではない）を次回の理事会にて提案する。

第二議案では、会誌について山田編集委員長より、会誌四十四号が進行中、九月末発行予定であることが報告された。

会誌オンライン公開について岡本副会長よりＥＢＥＳＣＯは、理事会での承認を得て契約するとし、この件は理事会で承認された。よって契約する。

ＥＢＳＣＯでは会誌発行より二年経ってから順次全面公開となる、それまではタイトルと要約のみの検索となる。一件の検索につき将来的に使用料金が発生し、学会収入となることが報告された。国立国会図書館・Ｊ－ＳＴＡＧＥへのアプローチも担当の岡本副会長に一任された。

会報について中村幸理事より、会報一二六号が進行中、九月末発行予定であることが報告された。

第二議案に関連して、「会誌投稿規定」の一部改訂について、岡本副会長より投稿の「受理」ではなく「受了」とすべきではないかと、の提案があり、「受理」・「受理日」を「受了」・「受了日」に変更するか、早急に編集委員会で検討することになった。

第三議題では、事務局のコピー機が八年目となり点検の回数が増え、借り換えを提案し承認された。

第四議題では、各担当理事より事業報告が、各地例会の担当理事よりそれぞれ報告が行われた。

第五議題では、令和七年度総会・大会について依田理事より報告された。総会では、副会長に飯島照仁理事・舩阪理事、理事に佐藤留実幹事、幹事に荒井欧太朗氏が新任された。役員役割分担は、会報編集委員として飯島理事・舩阪理事のあと、佐藤留実理事・八尾理事が選出された。

令和七年度第二回理事会が、令和七年十一月二十三日（日）午後二時よりＺｏｏｍで開催された。理事十四名が出席し、以下の議題について討議された。

一、各担当理事より事業報告
二、令和八年度総会・大会について
三、会長候補選考委員会の編成について
四、会誌・会報について
五、その他

舩阪副会長の司会進行で議題に沿って議事が始まった。

第一議題では、各担当理事より事業報告が、各地例会の担当理事よりそれぞれ報告が行われた。

第二議題では、令和八年度総会・大会について提案され、承認された。

日時：令和八年六月十三日（土）・十四日（日）

第一日目　見学会　藪内家（燕庵及び露地）
懇親会（開催予定）

第二日目　総会・大会

会場：同志社大学今出川キャンパス

シンポジウム：テーマ
「京都と茶の湯の近代化（仮）」

第三議題では、会長候補者選出に関する内規に従い、新会長候補の選考を行うよう、会長候補選考委員会に、谷村理事、仲理事、依田理事が選出された。次回理事会までに委員会を開催し、会長候補者を選出し、総会にて決定することが決まった。

第四議題では、会誌について、山田編集委員長より会誌四十四号の進捗状況が報告され、令和八年三月末に発行予定であるとの報告があった。

「会誌投稿規定」第五条の「受理」文言について、前回理事会で不適切ではないかとの疑義が挙げられ、会誌編集委員会で協議した結果、投稿規定との齟齬を埋めるため「受理」より、「受付」という文言に変更してはどうかとの提案がなされ、理事会で了承された。これにより「会誌原稿投稿規定」の一部改訂が決定し、次回総会で

承認を得る事項であることが確認された。

ＥＢＳＣＯとの契約が完了したことが報告され、準備が整い次第公開される旨の説明があった。ただＥＢＳＣＯでは和文・英文の要約を付けることが義務付けられており、和文の要約作成は著者に要請して問題はないが、英文についてはどう対応するか、今後編集委員会で協議して欲しいとの要求が岡本副会長から出され、編集委員会でこの問題以外にも公開にあたっての諸問題の対応・対策の検討を進めることになった。その一つとして、国立国会図書館において公開される条件として、学会ホームページなどでの会誌の公開が必須であることから、これについては総会での承認が必要とされ、次回総会で承認を得る事項であることが確認された。なお本会ホームページにおける会誌公開の細目についても前項の論文の英訳作成と併せて編集委員会で検討を進めることになった。

会報について、中村幸編集委員より会報一二七号が制作中で十二月末に発行予定であることが報告された。

例　会

東京例会

（令和七年七月十二日）

「幕末徳島藩の茶―『辛亥書記』を中心に―」

依田　徹

本発表で取り上げた『辛亥書記』は、近年徳島市内から出てきた個人蔵の日記である。嘉永四年（一八五一）から三年間の記録であり、「修心斎」の署名から徳島藩の歌人として知られた佐藤友信（修心斎、一八一九～一八八三）の記録と特定できた。友信は藩の商法方に勤務しながら、歌人として歌を教えていたと紹介されてきたが、『辛亥書記』からはさらに裏千家の宗匠としての活動が確認され、日記の間には五十三回の茶会記が記録されている。登場しているのは友信やその弟子たち、また本覚寺日義が中心となる。本覚寺は堺出身の塩屋一族が創建した日蓮宗寺院であり、一燈が茶室を作るなど、阿波の千家流にとって重要な寺院であった。そして『辛亥書記』には佐渡左近、樋口内蔵助、黒部所左衛門、穂積與兵衛（夕雨）などの蜂須賀家家臣団、嶋屋利兵衛、手塚甚右衛門、久次米兵次郎といった御用商人たちが、徳島城下で盛んに茶会を催していた様子も記録されている。中でも嘉永五年に三人扶持五石の油方坊主である吉成文龍が喜寿の茶会を催した際、祝いとして藩主一門の蜂須賀隼人から大綱宗彦の軸、また家臣の岡島氏助から玄々斎が鶴亀を描いた曲水指が贈られている。当時は玄々斎の活動時期であり、玄々斎が江戸土産として玉川焼の焙烙を配るなど、玄々斎の普及活動の一端もうかがえる。幕末期の大藩における茶の様相を物語る興味深い史料と言える。

東海例会

（令和七年九月二十七日）

「茶の湯の羽箒―特に名古屋の羽箒について―」

下坂玉起

名古屋の羽箒には、古い使い方や結い方、独特の好みなど特色がある。

久田流や尾州久田流は、羽箒で釜や風炉や炉、点前畳を清めてから点茶する。それは表千家の四代江岑が羽箒を扱いにくいものとしてふだんそばに置き、七代如心斎が羽箒と帛紗を並記して清めの重要性を教えたことに繋がる。

尾州久田流当代家元は今も三ツ羽を自作し、一枚の羽の上に二枚を横に並べ、断面が▽の柄を竹の皮で巻き、それを竹の皮を撚った紐で結う。これは利休が創始した三ツ羽の結い方に通じる。

名古屋の尾州久田流の近代数寄者森川如春庵は、益田鈍翁が庭で飼っていた鶴の羽を使った自流の結い方の羽箒を、名古屋の数寄者の茶会第一回敬和会で使っている。

如春庵の、茶の湯用としては大変変わった羽箒は、尾張徳川家初代義直の美しい文房具の羽根に酷似しているのでその写しと思われ、尾張徳川家への思慕を思わせる。

明治から終戦まで、日本は海外に進出し、保護法もないに等しかったため、外地に生息するセイランやノガン、カササギなど多種多数の羽が入手できた。

益田鈍翁は関東大震災後、名古屋に疎開したため、名古屋の茶の湯界は活況を呈し、その影響で、名古屋の松尾流の指物師・長谷川甫斎は多種多数の羽箒を結った。それに鈍翁や松尾流の家元などが箱書きし、甫斎自身も箱書きしたため、多数現存している。

名古屋の茶人たちは、羽箒には白い紐を好まず、竹の皮を撚った紐やそれに似た色のトウモロコシの皮を撚った紐を好む。それは尾州久田流や松尾流の羽箒の竹の皮を撚った紐を見慣れているため、白い紐に違和感があるからのようで、名古屋独特の好みである。

名古屋の羽箒は現存数が多く、尾張の茶の湯史や近代数寄者たちとの交流も想像でき、興味深い。

近畿例会

（令和七年十月四日）

「野村得庵の煎茶――賀寿と読書の楽しみの席飾り――」

舩阪富美子

これまで野村得庵が煎茶に高い見識をもっていたことは、あまり知られていない。しかし、遺された二つの煎茶会記を見れば、近代文人煎茶趣味の中でも群を抜いて秀逸と言える内容であることを知るのである。昭和四年五月十六日、売茶翁を顕彰する煎茶会「第二次高遊会」が京都の黄檗山萬福寺で開催され、得庵は有声軒を担当した。この日の会記と席の写真を収めた『高遊会茗筵図録』に基づき、席を構成した道具を取り上げ、得庵が設いに込めた意味を読み取りながら、席飾りの世界を解き明かすことを試みた。ただし、道具はごく一部しか伝来せず、得庵の自筆蔵帳や旧蔵者の売立目録などによって情報を補った。

その結果、各道具には中国古典文学の内容が含まれていたことが明らかとなった。例えば、待合の床幅「頼山陽賛・浦上春琴花卉」には『朱子語類』や米芾『画史』の「満堂春色（桃の一大枝）」、待合展観の幅「貫名菘翁四時読書楽詩画」の春幅には、周茂叔の「窓前草不除去」、本席床幅の「中峰禅師墨蹟」には『三体詩』所収崔塗詩「春夕旅懐」尾聯「自是不帰帰便得、五湖煙景有誰争」、香炉の平卓には六朝志怪小説の「劉晨・阮肇」、柱掛の袋形提物には「高遊外書」杜甫詩「落日」の「一酌散千愁」、菓子盂「木米染付摸開扇」には『唐詩選』所収杜審言詩「戯贈趙使君美人」、『楽府詩集』の「陌上桑」、『文選』の宋玉「高唐賦并序」など。これらの要素は意味をもって有機的に組み合わされており、見事な設いであるといえよう。

「煎茶文會における発意の仕掛け――「箕山瀑布図」を例に――」

佃　一輝

安永、天明、寛政ごろから文人たちによって催された煎茶会は、幕末以降の「煎茶道」の茶会とは異なる。文人たちの煎茶会は、茶会というより、文人の会合をいう「文会」の一形態であり、煎茶を用いた文会として、「煎茶文会」と呼ぶべきことを提唱する。

煎茶文会と煎茶道茶会との相違点は①漢籍素養②自娯去俗の美意識③儒学による交遊重視の思想④茶室でなく文房書斎を場とする⑤亭主と客との双方向性⑥書画と座

の同一性があげられる。

⑤は同時期のヨーロッパサロンに近似して、美術とテーマに対する鑑賞、意見及び異見の語らいを中心とする。亭主の提出した書画や煎茶器の取り合わせ、空間構成をもとにして、客は受容、批評、さらに展開や発展を試み、それを亭主が受容展開し、またそれを客が批評展開してと、連続的な美的時空の共有を目的とするものであった。

これらを前提として、煎茶文会の主催者でもあった池大雅、木村蒹葭堂、愛石の『箕山瀑布図』を見てみる。そこには共通して客の会話を生むための「仕掛け」が含まれている。

まず各作品とも隷書で「箕山瀑布」と記す。その特異な書体で、客はなんと読むかが最初の話題となろう。「箕山」と読んだ時、「箕山」とはどこかの問題に移る。漢籍素養により、中国古代の許由巣父の故事を彷彿して、この滝は河南省箕山であろうとする。池大雅作品の賛は、ことさら太古のイメージを刺激する。しかし「箕山」は古文辞的表現で、実は日本の「箕面」ではないかとの疑いを起こす客も出るであろう。現実の箕面の瀧と、想像の河南省箕山と。重層するイメージによって文会の会話は白熱するであろう。

さらに幕末の「青湾茶会」という文会に使用された木村蒹葭堂『箕山瀑布図』の賛には、「偶得其瀑水」とあって、席中に手桶を釣り「其瀑水」を強調する。河南省箕山の水か箕面の瀧水か、虚と実をないまぜにする遊びが、漢籍教養の中で展開する。

『箕山瀑布図』をもとに、文人たちの文人画における虚実の重層表現は、彼らの煎茶文会の重要な要素であり、客の会話と討論を促す「仕掛け」であったことを述べ、煎茶道とは異なる文人たちの会合、煎茶文会の内実を俯瞰した。

例会のご案内

※例会の日程・会場等、変更する場合・未定についても合わせてホームページまたは事務局までお問い合わせください。個人宛にメール等でのお知らせはしておりません。

※東京・近畿例会では、会場とＺｏｏｍのハイブリッド開催を行っています。オンラインの参加は、ホームページの例会参加申込フォーマットよりお申込と同時に、年会費二千円（会員）・四千円（非会員）をお振り込みください。

東京例会

令和八年三月二十一日（土）
（会場：埼玉会館５Ｂ会議室・Ｚｏｏｍ）
午後二時～
神保乃倫子・八木京子
「益田克徳の茶とその周辺 その6」
林克彦
「古染付と祥瑞について」

近畿例会

令和八年二月二十八日（土）
（会場：同志社大学今出川キャンパス　至誠館Ｓ４・Ｚｏｏｍ）
午後二時～
豊田裕章
「承久の兵乱以後の水無瀬殿、門跡寺院の桜井寺と尾山遺跡の庭園遺構について」
仲隆裕
「水無瀬神宮茶室燈心亭の露地と庭園」

北陸例会

令和八年三月十四日（土）
（会場：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館）
午後二時～
藤田若菜
「戦国大名朝倉氏の御菓子」

高知例会

令和八年二月一日（日）

（会場：高知県立文学館　慶雲庵茶室）

午前十時～正午

茶の湯関係文献を読み所感の発表「書籍輪読　Ⅱ」

高知支部二〇二六年度事業計画

午前十時～午後四時

茶席

　茶の湯文化学会の研究成果を実践する。茶の湯を一般の方々に親しんでもらうため「床飾り」「道具立て」はするが、お点前はお客次第として楽しめる茶席を設ける。

開催予定日を高知新聞「こみゅっと」に掲示

会費　四〇〇円

新刊紹介

『清技　昭和の茶道を支えた職人たち』

木津宗詮著　淡交社

定価二、七五〇円（税込）

『3ステップで読める　漢字の崩し字』

淡交社編集　淡交社

定価二、〇九〇円（税込）

『古染付と祥瑞―愛しの青（blue）―』

五島美術館企画・編集　淡交社

定価二、九七〇円（税込）

『野村得庵　事業と文化活動』

野村美術館学芸部編　思文閣出版

（非売品。野村美術館または寄贈された大学図書館・博物館にお問い合わせください。）

お知らせ

令和八年度総会・大会のご案内

　令和八年度総会・大会を左記の日程で計画中です。詳細は令和八年四月に郵送・ホームページにてご案内いたします。

日程：令和八年六月十三日（土）・十四日（日）

第一日目　見学会　藪内家（燕庵及び露地）

懇親会（開催予定）

第二日目　総会・大会

会場：同志社大学今出川キャンパス

シンポジウム：テーマ「京都と茶の湯の近代化（仮）」

令和八年度大会発表者募集

　令和八年度の研究発表者を募集します。発表を希望される方は、大会研究発表用概要を添えて、学会事務局までメールでご応募下さい。大会終了後、発表内容をベースとして論文にまとめ、学会誌『茶の湯文化学』に投稿していただけるような発表をお待ちしております。

開催日程：令和八年六月十四日（日）

応募資格：茶の湯文化学会会員であること

募集締切：令和八年二月八日（日）

発表時間：研究発表二十分　質疑応答十分

・メールにて、件名を「令和八年度大会発表募集」とし、大会発表用概要を添付してお申し込み下さい。

・応募の際は連絡先のほか、現在の所属先、肩書等もあれば、併せてお知らせ下さい。

・応募多数の場合は、審査の上決定いたします。

・詳しくはホームページをご覧下さい。

・その他ご質問等ございましたら、学会事務局までお問い合わせ下さい。

※事務局の年末年始の休業は、令和七年十二月二十六日（金）～令和八年一月七日（水）となります。